再版
明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　每月一回二日發行

堺枯川編輯

「家庭雜誌」

第壹號

明治三十六年四月三日發行

本誌の特色……一
我輩の根本思想……一
家庭雜誌の發刊を祝して（内村鑑三君）……七
動物虐待防止會……八
ユトピアの話……一〇
イソプ教訓談……一五
讀者の顧問……一六
參らしき生活、樂しき生活……一六
家庭の新風味……一七
家庭文庫……一八
古書新書……二〇
娘の學ぶべき事……二五
僕もおばアさんが欲しい（讀切小說）……二六
合作の手紙、倫敦の日本料理……三一
編輯及發行事情……三二

78476

由分社
東京市京橋區新港町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲本誌の特色▼

健全の思想
改革の氣象
清新の趣味
親切の教訓
平易の文章
通俗の說明

▲本誌の特色▼

▲定價 一冊六錢、半年分卅二錢、一年分六十錢。
▲郵稅 總べて當方持の事。
▲注文 總べて前金の事。
▲郵券にて御送金の場合は總べて一割増の事。

發行所 東京市京橋區新港町一丁目十七番地 由分社

大賣捌所
東京神田表神保町 東京堂
東京神田表神保町 上田屋
東京京橋須賀町 良明堂
東京京橋鎗屋町 北隆館
東京銀座四丁目 東海堂

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

明治三十六年四月一日印刷
明治三十六年四月三日發行
明治三十六年六月廿一日再版發行

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地 堺利彥
印刷人 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 森潤二

EALJ-M
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本誌の特色

健全の思想。　改革の氣象。
清新の趣味。　親切の敎訓。
平易の文章。　通俗の說明。

是れ我輩の自ら任ずる所にして、此特色を發揮せんが爲には、些かも骨折を惜しまず、飽くまでも我が力を盡し、永く讀者諸君と本誌の上に相まみえんとを誓ふ。只、資本の金なく、事務の才なき身なるが故に、世の美々しき大雜誌の間に立ちて其裝ひを競ふが如きは、到底我輩の堪へ得ぬ所である。されば此、薄く、小く、寂しく、身すぼらしき體裁においても、我輩は又そこに本誌の特色を守らんと欲する者である。

我輩の根本思想

▲家、家庭▲家の起り▲共同生活▲家族制度▲自由主義の革命▲世襲制度▲立憲代議政體▲個人主義▲[illegible]義▲社會主義▲結論

▲家、家庭　夫婦の組合を家と云ひ、其組合ひたる夫婦の共に住む場所を家庭と云ふ。是れが我輩の考へである。

▲家の起り　昔々、其昔、女の出產前後に、女はどうしても自分で食物を得る事が出來ず、又敵が來ても思ふように防ぐ事が出來ぬので、それで男が女の爲に食物を運んでやり、又女を保護して敵と戰ふ事となり、斯くて夫婦親子が家を作つて共同生活を始めたのであらうと思はれる。動物の中にも、穴や巢を家として、夫婦親子が共同生活をやつて居るのがある。尤も、動物にあつては、子の成育期が短く、すぐに母親の手を離れて獨立するので、親子の關係も長くは續かず、夫婦の關係は全く無いのが多い。然るに、人類にあつては、子の成育期が甚だ長くて、十年も十五年も保護し

てやらねば獨立が出來ぬので、其間には夫婦親子の情も厚くなり、とう〳〵其の關係が生涯のあいだ續く事になつたのであらう。こゝにおいて家と云ふ者が始めて完全に成立つたのである、して見れば、男女が共同生活の爲に組合つて、それが夫婦となり、家を作りしたのであるから、夫婦は即ち家、家は即ち夫婦と云つても善い譯である。そして其夫婦が家を置いて共に住む所は、穴でも、巣でも、但しは野原でも、之を家庭と云つて善い譯である。

▲共同生活　斯くの如く家は共同生活の爲に作られたのであるが、此一家から子孫が段々多く蕃殖して幾つかの家となる、そうする中には、敵と戰ふ爲にも、食物を得る爲にも、それらの家が別々に生活して居ては、種々なる危險があり、不便があるので、是非とも一團躰とならねばならぬ事になる、此團躰は即ち一族である。既に一家一族の團躰が出來る時には、其團結を堅くする爲に、一族の者は族長を戴き、一家の者は家長を戴き、總べて其指揮命令の下に服從して、進退驅引を便利にする事になる、是れが共同生活の第二段である。それから又是等の團躰が他の團躰と長く戰爭する結果として、小さな團躰は大きな團躰に呑みこまれ、弱い團躰は強い團躰に押しつけられなどして、結局、強く大きな團躰が中心となつて、それが段々に膨脹して行く事になる。すると其中心なる團躰の族長が王となり、帝となり、是れが又非常な權力を以て全躰を支配する事になる。それが即ち國家と云ふもので、共同生活の第三段である。

▲家族制度　斯くの如く、一家より一族となり、一族より國家となつたのを家族制度の國家と云ふ。昔から大概の國家は皆是れである。日本の國家もやはり是れである。此家族制度の國家においては、前に記した通り、家長、族長、國王の權力が非常に強く、それが多くの年代を重ねる中に、祖先を尊び家筋を重んずる風となり、族長等は國王を君として其臣下となり、家長等は族長を君とてし其臣下となり、一家内の眷屬は家長を君として其臣下となつてしまつた。そこで家族

制度の下にある家では、夫婦の組合と云ふ性質が一變して、男尊女卑の風となり、妻は全く夫の奴隷となつてしまつた。近き例を德川時代に取つて見れば、德川家は其當時において實際の國王で、毛利家とか、淺野家とか、上杉家とか云ふ諸大名は右に云ふ族長で、皆德川家を君として其臣下となつて居たのである。そして其れ等の族長の下には、又何某家、何某家と云ふのが澤山にあつて、おの／＼上杉家を君とし、淺野家を君とし、毛利家を君として、其臣下となつて居たのである、そして其何某家においては、當主何某が君となりて、妻も、子も、其他の眷屬も、皆其臣下となつて居たのである。貝原益軒の女大學に「婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ、敬ひ愼みて事ふべし、　女は夫を以て天とす、返す／＼も夫に逆らひて天の罰を受くべからず」とあるのを見ても、其當時の夫婦の關係が思はれる。

▲**自由主義の革命**　然るに、近世に至り、ヨーロツパには自由主義の革命が起り、日本には維新の革命が起り、封建制度は壞れてしまつて、四民平等の新國家が現はれた。是れは久しい間の家族制度が終に甚だしく腐敗したからで、何故に腐敗したかと云へば、それは世襲制度の罪である。

▲**世襲制度**　とは、第一世より第二世に、第二世より第三世に、それより子々孫々に至るまで、世々其職を襲ぐ事である、家柄、家筋を大事とする家族制度は、此世襲と云ふ事を眼目として組み立てられた者である。即ち、將軍の子は將軍となり、大名の子は大名となり、侍士の子は侍士となり、足輕仲間の子は足輕仲間となり、百姓町人の子は百姓町人となる、と云ふのが德川氏の國家の組み立て方であつた、然るに、百姓町人は幾ら賢こくてもヤハリ百姓町人で、足輕仲間は幾らえらくても、ヤハリ足輕仲間であるのに、大名は幾ら馬鹿でもヤハリ大名で、將軍は幾ら阿呆でもヤハリ將軍であるから、長い間には、國家の上の方には馬鹿や阿呆ばかりが澤山に集まり、國家の下の方にばかり賢い人やえらい人が澤山に集まつたので、それでト

ウ〱世の中が引つくり返つてしまつたのである、西洋で自由主義の起つたのは、馬鹿や阿呆ばかりの國王や貴族が、盛んに壓制政治を行うて人民を苦しめたので、それで人民が堪らなくなつて、人民にも自由があるぞと云つて、人民の權利を唱へだしたのである。謂はゆる民權自由の説である。そして其民權自由の説は終に

▲立憲代議政躰　と云ふ者を產み出だした。立憲代議政躰とは、憲法を定めて國王の權力を押しちゞめ、人民から代議士を選びだして國會を拵へ、其國會の中から大臣を政府に出して、それに政治をやらせると云ふのである。日本でも明治廿二年に憲法が發布せられて、廿三年から帝國議會（即ち國會）が開かれて、先づ〱代議政躰の形が出來た。そこで此代議政躰の新國家においては、家柄にも依らず、家筋にも構はず、實際力量のあるものはズン〱と何の事業でも勝手にやる、仲間の子がイツの間にか總理大臣にもなる、天秤棒を擔いだ奴がチヨツトの間に大富豪にもなる。即ち、世襲制度は一變して實力競爭となり、家族制度は一變して個人主義となつた。

▲個人主義　家よりも其家の一個人を重んじ、國よりも其國の一個人を重んずるのが個人主義である。個人の爲の國、個人の爲の家と云ふのが個人主義の考へである。然るに、家族制度の國家では、何も家の爲、何も國の爲と云つて、個人の自由、個人の權利は、少しも認められずに居たのである。それも昔の世の中では止むを得ぬので、團結を堅くする爲には其の必要もあつたのであるが、段々時勢が變つてモウ其必要は無くなつて來たのに、國王はヤハリ一國の爲と稱して我儘をしちらし、家長（或は族長）は一家（或は一族）の爲と稱して威ばりちらすので、そこで前にも云ふ通り、民權自由の説が唱へられて、其民權自由の中には即ち個人主義が含まれて居たのである。こゝにおいて一家內の有樣も亦一變した、夫婦はモウ決して君臣では無く、再び元の組合に立戻つたのである。そうして、國家の政治が政府と議會とに依つて行はるゝ如く、一家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の家政は夫と妻との協議相談に依つて行はるゝ事となつた。そうして、先祖より子々孫々に傳はる一家の系統は、別に深き意味を持たぬ事となつて、只男子と女子とが組合つて新に家を作る事になつたのである。こゝにおいて家庭と云ふ言葉が、夫婦の共に住む場所として大いに價を示して來たのである。然るに、こゝに又、昔の國王や貴族にも比ぶべき、恐ろしき大壓制者が現はれて來た、それは外でも無い、

▲富豪である。富豪とは大金持の事である。昔から金持は無いでも無かつたが、富豪と云ふ程の者は全く近來の產物である。近來、文明の進歩につれて、工業、商業が頓に盛大となつて、富の產出が急に夥だしき事となつて、其の夥だしき富を、個人主義の實力競爭で以て、奪ひあひ、ばひあひする中に、終に非常な不平均が出來て、富豪を產出するに至つたのである、家族制度を打ち亡し、世襲制度を打ち破る爲には、個人主義も善かつたが、こゝに至つて甚だしき弊を生じて來た。富豪の出來あがる次第を察するに、可なりの金を拵へる迄こそは、其人の實力にも依つたであらうが、或程度の大きさまで達した以上は、丁度雪丸が譯もなくズン／＼と容をふやして行く如く、見る／＼中に大分限となりすますので、そこには實力も何もあつたものでは無い。それから其人が死ぬる時には、其子が其財產を相續する。丁度、昔、將軍の子は幾ら馬鹿でも將軍になり、大名の子は幾ら阿呆でも大名になつた通りに、今では百萬圓の家の子は幾ら馬鹿でも百萬圓の主人となり、千萬圓の家の子は幾ら阿呆でも千萬圓の主人となる。そして、丁度、昔、大名と百姓とあつた如く、今では、金持と貧乏人とが出來て、金持は其金の力でドコまでも貧乏人を苦しめる。そこで、折角、世襲制度を破し、壓制政府を倒した所が、直に又新しい世襲制度が出來、新しい壓制政府が出來た譯である。それで今の世の中は、一にも金、二にも金と云ふ有樣で、折角芽を吹きかけた家庭にも、やはり金の勢力が及んで來た。即ち、家と云へば夫婦の關係よりも先づ財產の事を考へる。丁度、昔、家柄を尊んだ如く、今では財產を尊ぶ事になつて居る　財產を目當に妻を貰ふ男もあれば、獨身では食ふに困るからとて嫁入する女もある。子に學問をさせて月給を取らせるのを、資本をおろして利子を取るように思うて居る親もある。遺產の分配について盛んに兄弟喧嘩をやつて居る連中もある。總べて是れ生活の不安心から起る事

て、要するに富豪が跋扈する結果である。それで此弊を救はねばならぬと云つて、社會主義と云ふ者が産まれて來た。

▲社會主義　國王や貴族ばかりに政治を任せておく事は出來ぬと云つて自由主義が起つた如く、土地や資本を富豪の勝手にさせてはならぬと云つて社會主義は起つたのである。社會主義は個人主義の反對で、何事も別々にせずに共同してやらうと云ふのである、何事も競爭せずに組合つてやらうと云ふのである。それで土地も資本も、一個人の奪ひあひ次第、一個人の取り上げ次第と云ふ今日の有樣を止めて、何もかも總べて會社の物として、皆が一しよに使はうでは無いかと云ふのである。そして皆がそれ／＼應分の働きをして、出來た物を皆が平等に分配したら善いでは無いかと云ふのである。それで社會主義は、出來る事なら一日も早く國家の競爭をも止めて、地球上の人類全躰の共同生活をやりたいと云ふのである。蓋し是が人類共同生活の第四段で、又尤も終りの段であらうと思ふ。結局社會主義は人類平等の主義である、人類同胞の主義である、相愛し相助くる共同生活の主義である。そこで此社會主義より見る時は、夫婦が平等にして、相愛し相助け、眞の共同生活を爲すのが家の理想である。家庭は即ち其理想を現はすべき場所である。

▲結論　以上、歷史に依つて家の變遷を見たのであるが、家の事情は常に社會の事情に伴ふもので結局、今日においては、家族制度を離れて個人主義に移り、個人主義より更に社會主義に向はんとして居るのである。然し、一方にはマダ家族制度の思想が殘つて居て隨分頑固な事を云ふ者もあるので、それに對しては、「夫婦の組合を家と云ひ、其組合ひたる夫婦の共に住む場所を家庭と云ふ」事を、よく／＼覺らせるように勉めねばならぬ、次に、今の所ではマダ個人主義の信者が甚だ多くて、黃金萬能、財產神聖を唱へて居るので、それに對しては「夫婦が平等にして相愛し相助け眞の共同生活を爲すのが家の理想である」事を說き、財產などは家に必要なる者で無い事を知らしめ、「家庭は即ち此理想を現はすべき場所である」事を、よく／＼覺らせるように勉めねばならぬ。そうして、此家庭の中よりして漸々社會主義を發達せしめて行かねばならぬ。是れが此雜誌を作るについての我輩の根本思想である。今後本誌に現はれる我輩の議論や、意見や、記事や、皆此根本思想から割り出される者である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌の刊發を祝して

（我輩は内村先生の祝辭を得て、且つは喜び且つは恐れた。此祝辭を此紙上に載せるのは、一面においては我輩の極めて光榮とする所であると同時に、他の一面においては、殆んど背水の陣を布くようなもので、一歩も退く事はならず、寸分の懈怠の念をも許さぬ事になるのである、然し我輩は終に之を載せる事に決心した。それは決して我輩が自分の自惚心に滿足を與へんが爲では無く、實に自ら誓ひ人に誓ふ證文とせんが爲である。讀者諸君の此意を諒とせられんことを願ふ。枯川生記す。）

若し日本國に家庭雜誌を出す權利と義務と責任とを有つて居る人がありとすれば其人は余の友人堺枯川君であると思ふ、君は性質が溫和で、友誼に篤く、善を視る眼を有つて居て、惡を視る眼を有つて居らない、君は即ち此怨恨、猜嫉を以て滿ち充ちて居る日本國には極く々々稀れなる人であつて、君の如き人がまだ此社會に存つて居るのはまだ之に一縷の希望が存つて居る理由であらふ。

余は君に望む、君が大責任に當るの心を以て此雜誌の編輯に從事せられんことを、即ち之を以て、日本國は愚か、支那、朝鮮、印度、少くとも人類の半數に新幸福を與へんとの大希望を以て此小事に當られんことを、何故なれば家庭は伊藤侯其他の東洋の英雄が言ふやうな決して小事ではない、言ふまでもなく國家の基礎も社會の根本も共に此にあるのであつて、國家を顧みて家庭を顧みない國家は必ず滅亡すると定つて居る、爾うして今日の日本國は今や此危險なる地位に居るのである。

「婦を愛する者は己を愛する也」とは基督敎の聖書の中にある言辭である、是れは東洋人の耳には甚だ氣障りのする言辭であつて、彼等が甚だしく基督敎を嫌ふのも其中に斯かる敎訓があるからである、然し西洋今日の富强なるものは實は斯かる敎訓が永の間彼等の中に傳へられたからであると歷史哲學者は言ふ、若し日本

國の經綸家が如何程深い意味が此言辭の中に含まつてあるかを解し、ホームを潰す者は人類を潰す者であるの考へを以て世に臨まば、社會の改良は全く希望のない事ではあるまいと思ふ。枯川君たる者は宜しく此態度を以て我國今日の東洋的社會を其根底より改造すべきであると信ずる。

明治卅六年三月十九日

東京市外角筈村聖書研究社に於て

內村鑑三

お紫「チヨイトお銀さん、あの錠二さんがね、近々に結婚すると云つてよこしましたよ。

お銀「へえ、錠二さんが結婚‥‥。おかしいのね、あなた一向平氣で‥‥。して一體誰と結婚するのです。」

お紫「私とよ。」

動物虐待防止會

我輩と諸君とは互に助けあはねばならぬ、何となれば、同じく是れ日本人であるからと云ふ。又、我々と支那人とは互に助けあはねばならぬ、何となれば、同じく是れ東洋人であるからと云ふ、又、我々と**イギリス**人、**ロシア**人、**アフリカ**人とは互に助けあはねばならぬ、何となれば、同じく是れ人類であるからと云ふ。されば更に一歩を進めて、我々と馬、牛、犬、猫、蝶、鳥とは互に助けあはねばならぬ、何となれば、同じく是れ動物であるからと云はねばならぬ。人の同情は是非こゝまで來ねばならぬ。若し動物を酷く取扱ふ人があるならば、其人は必ず雇人を酷く取扱ふ人である。若し動物を用捨もなく鞭つ人があるならば、其人は必ず細君をナグル人である。動物を輕んずる心は即ち人を輕んずる心で、動物を愛する心は即ち人を愛する心である、されば、動物を酷く取扱ふ事は、一人としては實に人たるの名に耻づべき事であり、社會としては

實に文明の名に耻づべき事である。そこで動物の虐待(即ち酷く取扱ふ事)を防ぎ止める會が思ひ立たれたのである。

此會は、多くの名士の發起に依りて、昨年の春から設立せられて、東京芝區三田豊岡町廣井辰太郎氏方に事務所を置き、神田區一ッ橋外學士會において毎月評議員會を開いて居る。評議員の中には左の人々がある。

本田増次郎　高島平三郎　高島圓
内村鑑三　山縣五十雄　斯波貞吉
山縣悌三郎　廣井辰太郎　湯本武比古
大内青巒　境野哲　櫻井義肇
村上專精

我號も亦評議員の一人に數へられて居るので、何にも役には立たぬが、せめて此ような紹介でもしておくのである。

此會の事業としては、昨年既に二回の演説會を開き今年は又小冊子發行の計劃もある。警視廳においては、此會の起つてより以來、殊に牛馬使用取締規則の勵行に勉め、やゝ其結果も現はれて來た樣子である。内外士女の賛成入會は既に甚だ多く、中には多額の寄附金をせられた方々もある。

御賛成の方々は何卒續々御入會を乞ふ。御申込は前記廣井氏宛、或は社内堺宛にても宜し

▲趣意書　御入用の方は五厘切手封入にて御申込あれ。すぐさま御送り致す。

▲徽章　御入用の方は代價廿錢　郵税二錢御送りあれ。徽章はニッケル製にて、時計の鎖にも付けられ、洋服或は和服の襟にも付けられます。隨分上品に出來て居ります。

▲畜類のまごゝろ、動物佳話、此二つの小冊子は此會の趣意に基いて書かれた者。「家庭文庫古書新書」欄を御覧あれ。

ユトピアの話

昔し英國て、モアと云ふ人がユトピアと云ふ本を著はして、大變な評判になつた事がある。其本は、ユトピアと云ふ島の人民が、實に幸福に、愉快に、便利に生活して居る有樣を書いた者てあるが、其ような島が實に在つた譯てはなく、只モアの心中の理想を書き現はした者てあつた。それより以後、ユトピアと云へば、未來の社會を想像した者や、理想の社會を寫し出だした者や、總べて其れらの者を意味する事になつた。

それて、其ユトピアを書いた本は色々あるが、其中て尤も面白く、尤も善く出來て居るのは、ベラミーのルッキング　バックワードてある、此本は、アメリカのボストン市の人が、睡眠術にかゝつて百年あまり眠つてしまつて、フト目が醒めて見たれば、紀元二千年と云ふ時てあつて、見るもの、聞くもの、皆意外の事ばかりて、實に社會の進步變遷に驚くと云ふ話てある、紀元二千年と云へは、今年が千九百三年てあるから、今より九十七年後の事て、果して其れまでに其ような有樣になるかドウか、固より受合の出來る話ては無く、或は又、それとは餘ほど違つた有樣に變遷するか、或は又、それよりも餘ほど先きに進步して行くか、其邊も分らぬ話てあるが、何にせよ、大躰そんなような風に傾いて行く事だけは確てあらうと思ふ。そこて其話の荒ましを書いて見たいと思ふのてあるが、初から小面倒くさい理窟ばつた所を書いても、讀者諸君の興を引きかねる氣遣ひがあるので、こゝには先つ買物の一段と夕飯の一段とをザットつまんで書いて見ましよう。

▲娘の買物、物賣場、運輸管

百年あまり眠つた人には西野と名をつけておく。其西野が智慧子と云ふ娘に連れられて買物に出かけて行く。

智慧子「サア西野さん來ましたよ。是れが私達の區の物賣場てす。」

此物賣場は政府から設けられた者て、此時代にはモ

ツ商人が銘々に店を出す事は無くなつて居るのである。そして此物賣場は、先づ喩へて云へば今の勸工場のような者で、光線の善くはいる廣い大きな建物で、眞中には噴水があつて、其周圍には捨床几などがあつて、そして四方の壁に沿うて色々の店がある。西野は只驚いて此景色を見て居ると、智慧子は色々説明して聞かせる。其説明に依れば、此ような物賣場が各區に設けられてあるので、ドコに住んで居る人でも、五分か十分歩きさへすれば必ず買物が出來ると云ふ事である、それから壁に沿うた店々を眺めると、其店々で賣る品物の看板が掛つて居る。智慧子はモスリンの店へ足を向けた。そこにはモスリンの切地の見本が澤山に並べてある。

西野「オヤ、こゝには番頭も小僧も居ませんね。どうしたのでしよう。」

智慧子「まだ誰も居なくて善いのですよ。私まだドレを買ふか極めないのですもの。」

成程、品物の撰びをする間は誰も居なくて善い筈である。品物には一々札がついて居て、其札には其品物の産地、性質、値段等が一々明細に書いてある。そして、それは政府が責任を持つて居るのであるから、少しも疑ふ事は無い。智慧子は暫くアレコレと見た上て、すぐ側にある呼鈴の釦を押した。すると一人の書記がヒョコリとそこに現はれて、智慧子の注文を是々と聞いて、すぐにサラ／＼と注文狀を書いて、それを小箱に入れて運輸管の中に落した。運輸管と云ふのは水道の鐵管のような者で、空氣の壓力を用ゐて、手紙でも、小荷物でも、極めて速かに遠方に送る事になつて居る。それから智慧子は通帳のような者を出して書記に渡す、書記はそれに今の賣物の價を記入して、すぐに又引込んでしまつた。此時代には錢だの貨幣だのと云ふ者は全く無くなつて、政府から總べての人民に信用手形が渡してある。そして人民は其信用手形を以て何でも入用な物を買ふ事になつて居る。智慧子が今出した通帳のような者は即ち其信用手形である。西野は是等の手續を見て居て何の事やら少しも分らぬ。

西野「智慧子さん、こゝは一體見本ばかり陳列する店ですか。」

智慧子「オホヽヽ店と云へば皆見本ばかりですよ。品物は皆市の中央倉庫にあるのですもの。先刻書記が注文狀を運輸管の中に入れましたでしよう。今頃はあれが中央倉庫に屆いて居ましよう。」

西野「なアるほど。」

智慧子「西野さん、今度あなた父に案内をさせて是非一度中央倉庫に行つて御覽なさい、私も一度行つて見ましたが、それは實に驚いてしまひますよ。」

西野「ハヽア、それは是非一つ行つて見たいものです。まあザットどんな仕掛になつて居りますか。」

智慧子「そうですねえ。先づ中央倉庫には取扱ふ品物の種類に從つて澤山の部わけがしてありましてね、其一部々々で諸方の物賣場から來る注文を受けつけて居りますが、其注文を受けつけてから、荷作りをして、すぐに運輸管で送り出す手順の早いこと、それは實に見て居ても心地の善い程ですよ。荷作や何かは總べて機械でやるのですから、チョット人手を掛ければアトは自然に紙でくるまる、糸でからげられる、其儘ゴロ／＼と運輸管にはいつて行く、それは實に不思議のようですよ。」

西野「なアるほど、實に便利な譯ですな。そして其荷物は今に此物賣場に屆くのですか。」

智慧子「いゝえ。それは別に昔の郵便局のような者がありまして、中央倉庫からソコに屆くと、直にソコから内に配達して呉れます。是れから内に歸つたら屹度もうモスリンの小包が屆いて居ましよう。」

西野は頻りに其便利を感嘆して居たが、

西野「然し、智慧子さん。こんな便利な事は大きな都會より外には迚も出來ますまい。」

智慧子「なに大槪の村には物賣場がありまして、そしてヤハリ運輸管が近處の都會に通じて居ますから、別に大した不便はありません。尤も、昨年私が或田舍に行つて居ました時、都會から十里ばかり離れた所でしたが、注文してからの品物の屆くまでにドウ

しても三時間ばかり掛かるので、随分不自由だとは思ひましたが、それもモウ近々にズット早く屆くようになるそうです。」

是れがザット紀元二千年の買物の有様であります。次には夕飯のお話を少し致さう。

▲道路の雨蔽ひ、公食堂

「今夜は西野さんを公食堂に御案内しよう」と智慧子の父が云つたので、西野は又不審そうな顔をして居る。此時代では、食物は總べて公けの料理所から分配するので、其材料を銘々の内に配達して貰つて其れを自分で料理しても善し、又こちらから出かけて行つて食べても善い。其出かけて行つて食べる所が即ち公食堂である。大概どこの家でも、朝晝二度は内で食べて、夕方だけ皆打連れて公食堂に出かける事になつて居る。

其日の晝から雨が大變に降りだしたので、公食堂行は迚もダメであらうと西野は思つて居た所が、其時刻になると、細君も娘もチャンと仕度をして部屋から出て來た。そして、蝙蝠傘も持つて居なければ上靴も穿いて居ぬ。西野は不思議だなと思ひながら附いて行くと、成程、表に出て見れば傘は入らぬ。町の通りの人道には一面に防水布の雨蔽が張つてあつて、丸で廊下の中を歩くような心地である。それに又西野が驚いて居ると、智慧子はクス／＼笑つて居る、外套を着て、長靴を穿いて、そして蝙蝠傘をさゝなければ、迚も雨の日に外を歩く事の出來なんだ昔話を西野がすると、

智慧子「まだ其頃は道路の雨蔽も出來て居ませんでしたかねえ。」

と智慧子は却つて其れに深く驚いて居る。一番先きに歩いて居た智慧子の父は、二人の話が聞えたと見えて、急に後を振り返つて、

父「西野さん。そこが即ち十九世紀と廿世紀と違ふ所ですよ。ボストン市の三十万の人が、雨が降ると云つて、銘々に三十万本の傘をさした所が十九世紀の特色ですね。廿世紀では何百万の人か只つた一本の傘をさして居る譯ですからね。」

と説明した。智慧子は笑ひながら、

智慧子「そう〳〵。傘の話はお父さんのお箱だつた。西野さん、イッても父は其事を云ふのですよ。十九世紀の人は他人の事は少しも思はずに自分一人の事ばかり考へて居た、其尤も著るしい證據は銘々一人一人に傘をさして歩いた事で分ると、よくイッても其事を云つて笑つて居るのですよ。」

西野は頗る赤面して居たが、兎角する中に早や公食堂へと來た。大きな石段を上つて、長い廊下を曲つて行くと、或部屋の戸に智慧子の父の名札が掛かつて居る。其戸をあけて中にはいると、丁度四人坐れる程の立派な食卓が整へてある。大きな窓の外には噴水の高くあるのが見えて居る。

西野「是れでは丸て御自分の内のようですね。」

父「えゝ〳〵、これがヤハリ我々の內なんです、只少し離れて居るだけの事て。區內の住人は此建物の中に皆一間づゝ自分の食堂を持つて居るのです。通りがゝりの人などの爲には、別に又部屋もあります。それで私等がこゝて食事をしようと思へば、前の晩にチョイと注文書を送つておくのです。」

そこに給仕の少年がはいつて來た。給仕とは云へ、人品のある身なりて、相應の教育を受けて居る事が分る。智慧子の父は其少年に何やら云ひつける、其少年は一々承知して返つて行く。其樣子を見るに、云ひつける方でも向ふを輕蔑して居る所は少しも無い。又云ひつけられる方でも別段に恐縮するやうな所は少しも無い。

西野「あんな立派な少年が善くコンナ下賤な事をやつて居るものですね。」

智慧子「下賤と云ふのは何の事です、西野さん。」

父「下賤と云ふ言葉は今ではモウ無くなつて居るから、智慧子の分らないのは無理も無い。西野さん、今の社會には上下も貴賤もありませんからね。」

西野は又少からず驚いて居る。

西野「ではアノ少年等は自分から好んで給仕をやつて居るのですか。」

父「いや、自分から好む譯では無いが、並の若い者皆一度はアンナような仕事をする事になつて居るのです。私も四十年ほど前に、丁度此公食堂で六個月ばかり給仕を務めましたよ。」

是れが先づザット紀元二千年の食事の有樣であります。次號には少し筋を立てゝ此**ユトピア**のお話しを致しましよう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

イソプ教訓談

(一) 獅子と鼠

獅子が眠つて居ると、鼠が其顔の上を飛んで渡つたので、獅子は忽ちに目をさまし、腹を立てゝ起きあがり、鼠を引捕へて既に殺さうとした其時、鼠が哀れげに歎願するよう、「命だけ御助け下さるならば必ず御恩は返しまする。」獅子は笑つて鼠を逃してやつた、それから間もない頃の事であつたが、其獅子が獵人に捕へられて、荒繩でもつて其場にヒシと縛りつけられてしまつた。所が、彼の鼠、獅子のうなり聲を聞きつけてやつて來て、其繩を嚙みきつて獅子を放してやりながら、徐ろに云ひだすよう「あなたは私から恩返しを受けようなどとは思ひがけもなさらず、私が何か御役に立つ時があらうと考へたのを、嘸おかしい事におぼしめされたで御座いましようが、鼠だとて獅子を助ける事もあると、今は御分りになつたで御座いましよう。」

(二) 狼と小羊

狼が、牧場から迷ひ出た小羊に行きあつて、こいつは一番、手荒い事をせずに、小羊が得心して己れに食はれるような云ひがゝりを仕てやりたいものだと考へて、「コラ〳〵、其方は昨年予に對してヒドク失禮な事を致したな」と云ひかけた。小羊は悲しげな聲をして、「アレマア、それはまだ私の生れぬ前て御座います」と泣きだした。それで狼は又「其方は予の草原で腹を肥やした事があらう」と云へば、「イヤ〳〵どう致しまして、私はまだ草なと食べた事が御座いませぬ」と小羊は云ふ。狼又々「では其方、予の井の水を飲んだであらう」と云へば、「アレめつそうな、私はまだ水など飲んだ事が御座いませぬ。飲むにも食べるにも、私にはまだ母の乳より外は無いので御座いますものを」と云ひ開く。そこで狼、小羊を引つかんで、「よし〳〵、たとひ其方いかように辯解いたさうとも、予は夕めし無しには得居るまい」と云ひながら。とう〳〵小羊を食つてしまつた

暴君は何とでも其暴行の口實を作る者である。

讀者の顧問

我輩は常に讀者諸君の顧問となりて、何事によらず相談に應ずる積りである。諸君もし何か知りたき事あり、尋ねたき事あり、或は又深く思ひわづらふ事などもあらば、膝とも談合と云ふ事あり、猶よりはマシと云ふ事もあるゆゑ、遠慮なく我輩に御相談ありて然るべし。眞にマジメなる御相談にて、我輩の力量の及ぶ事ならば、必ず其れ相應の助言を致す。して其事か若しも秘密であるならば勿論嚴重に秘密を守り、差支なきかぎりは本誌に記して廣く人にも見てもらふ事に致さう、右につき注意の件々左の如し。

一、些かにても輕薄の氣の見ゆる者には決して御相手致さぬ事。

一、衣食の爲に職業の世話をせよと云ふ御相談には應じかぬる事。

一、自分で少し骨を折ればスグに知れる筈の事を御尋ねあるとも、それには御答へ致さぬ事

一、秘密の御相談にて返信を要する場合には郵便切手御入組あるべき事

珍らしき生活樂しき生活

我輩は讀者諸君の中から、珍らしき生活と樂しき生活との通信を得たいと思ふ。自分自身の事でも、又は見聞した事でも、是れは面白いと思はれる者があつたら、何卒御知らせを願ひたい、但し其れを書くについては左の條々に御注意を乞ふ。

一、總べて有りの儘を有りの儘に書く事

一、文章など氣取らずに、成るべく口で話す通りに書く事。

一、長短は固より御隨意であるが、こゝこそ肝腎と思はれる點は隨分詳細に書く事、さなくては折角の珍らしき所、樂しき所が十分に現はれぬかも知れぬ。其代り面白く無い所はズン／＼略して書く事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭の新風味

▲第一冊、家庭の組織（結婚論、夫婦論、家族論。附錄、春風村舍の記）

▲第二冊、家庭の事務（秘書官としての事務、大藏大臣としての事務、內務大臣としての事務。附錄、由分子禁煙の歷史）

▲第三冊、家庭の文學（新聞、雜誌、書籍、日記、手紙、和歌、俳諧）

▲第四冊、家庭の親愛（夫婦の間、親子の間、家族の間。附錄、毛皮裏の外套、愛犬黑）

▲第五冊、家庭の和樂（食卓、來客、宴會、散步及び出遊、遊戲、小供及び老人、家畜及び庭園。附錄、當世紳士、藤室牧師の家庭）

▲第六冊、家庭の敎育（妻の敎育、家族の敎育、子の敎育。附錄、極樂寺谷の晝飯、顏を美しくする法、家庭の新風味補遺）

▲全六冊定價金壹圓　郵稅なし

第壹號

右は內外出版協會から出版した我輩の小著述であります。本誌の讀者諸君には、いつか善き折に、是非御一讀を願ひたいと思ふ。就いては

▲本社において取次販賣を致し

猶讀者諸君に對する本社の志しとして、

▲奇麗なる赤き表紙をつけたる合本として差しあげます。又、左の二書も同時に本社において取次販賣を致す。其定價等は廣告にて御承知を乞ふ。

言文一致普通文　全一冊

家庭夜話　全三冊

▲第一冊　子孫繁昌の話　堺枯川譯述

▲第二冊　質素儉約の話　加藤眠柳譯述

▲第三冊　仁慈博愛の話　志津野又郎譯述

家庭文庫

善き家庭には是非一つの文庫が欲しいものです。文庫と云つて何も大きな庫の事ではない、小さな本箱でもよい、チヨイとした書棚でもよい、形は何でもよい、只幾らかの善き本をそこに集めておきたいのである。學者達が其れ〳〵專門の書籍を集めるとか、又學者と云ふほどでなくとも、其れ〳〵の身分職業に從つて必要な書籍を集めるとか云ふのは、それは暫く別の事として、こゝには總ての善き家庭に幾らかの善き本を集めて小さき文庫を作りたいと望むのである。

書籍とか書物とか云へば六かしく聞こゆれど、本と云へば繪本もある、淨瑠璃本もある、小說本もある、本は決して六かしい者ばかりではない。我々の考ふる所に依れば、本は一種の友達である。友達であるから、自分の氣に合ふ者、好きな者、爲になる者を選べば善い。何も厭な者、六かしい者、やかましい者を連れて來ずとも善い。さすれば、本なんぞ讀みたくもないと、頭から棄てゝ掛かる道理は決して無い。凡そ此世に生れてヒトリの話相手も入らぬと云ふ人はヨモあるまい。そこで、家庭に文庫を作るのは、澤山の善き友達を拵へておくのであるから、是れに異存のあるべき筈は無い。

扨、文庫が出來たとして、勿論誰とても毎日毎晩本ばかり見て居られる者では無いが、側にあればツイ添乳の暇にも讀む事が出來る、晝寢の伽にする事も出來る。遠方の友達を尋ねて行くのは中々思ひたちにくいものであるが、ツイお隣の仲好さんには日に三べんも顏を合はせる事がある。日に三べんも顏を合はせて何が珍らしい、と云ふ人もあるか知らねど、深い馴染は又格別なもので、同じ話を繰返すのに又新らしい興が湧いて來る。三度讀んでも其度每に吹きださずには居られぬと云ふ本もある、五遍讀んでも其度每に必ず胸が迫つて來ると云ふ本もある。是れが即ち愛讀の書と云ふのである。

それから又、本は友達で、人の好きなが必ず我れに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も善いとは限らぬゆゑ、前にも云ふ通り、我れは我れの氣に合ふのを集めておけば其れで善いのであるが、人は見かけによらぬと云ふ事もある如く、見かけによらず面白い本も隨分あるもの、それを見つけだして其味を嚙みだすのは、また一種云ふべからざる趣味であらう。それから又、久しく名を聞いて床しく思うた本を手に入れて、それを初めて讀んだ時、それを本箱に飾つた時、其嬉しさは何に比へん、是れまた一種云ふべからざる趣味であらう。

それから又、本は友達と云ふもの丶、友達よりも善い事は、死んだ人でも、昔の人でも、遠方の人でも、西洋の人でも、男でも、女でも、老人でも、小供でも、自由自在に會つてシミ〴〵と話が出來る。心配事のある時に、ちよつと孔子様にお目にかゝつて、其御意見を聞く事も出來る。氣のクサ〴〵とする時に、ちよつと近松門左衞門よんで來て、御乳の人粲の井の子別れの所でも、ツイ一段聞かせて貰ふ事も出來る。此樂みと慰みとを知らぬ者は、ホンに何と云ふ不仕合せな人であらう。

右の通り、本は固より讀む爲の者であるが、讀む爲と同時に又裝飾の爲にもなる。書棚や本箱を奇麗にして、それに順序よく色々の本を置きならべる、是れほど上品な裝飾は無い。生花も善い、掛軸も善いが、それと同時に書棚か本箱か丶一つや二つ置いて無くては、どうしても其家の趣味が全からぬ心地がする。少し餘裕のある家などで、似せもの丶應擧や何かを澤山に買ひこむ代りに、和漢西洋の書籍を集めて、それを客間なり應接間なりに飾るならば、いかに床しく、いかに尊く見えるであらう。そこで我輩は家の貧富に係はらず、各々其分に應じたる家庭文庫の設立を、敢て讀者諸君に勸告する者である。

かように我輩が家庭文庫の設立を勸告するについては、今後とも本誌の上に毎號必ず「家庭文庫古書新書」と云ふ一欄を設けて、古今の善き本を少しづゝ紹介する積りである。

家庭文庫 古書新書

▲浮世風呂(式亭三馬)　我輩は先づ第一に三馬の浮世風呂を讀者諸君に推薦致す。德川文學の中で滑稽諷刺の妙ある者は、式亭三馬と十返舍一九とであるが、一九の膝栗毛には兎角(無邪氣ではあるけれど)猥褻な事が多くて、御婦人などにはお勸めも致しかねる次第であるが、そこは三馬なら安心なもので、そして皮肉で、キビが善くて、キヤ〳〵と來る所、實に堪らぬほど面白い。左に浮世風呂の一節をお目にかける。(浮世風呂は一冊別になつた本もあるが、どうせ買ふなら博文館の帝國文庫の第十三編三馬傑作集を買ふが善い。定價は六十錢)

△女中を罵るおかみさん

●ホンニあなたの女中衆は、がせいに能く働きますネ、水ぎれの時にも擔桶で水をかつがれますが、さつ〳〵と氣味のよい人でございますネ、私どもあたりの三などゝ申しては、いくぢがなくて世話ばかり

やけますはな、それに此間は風だと申して臥つて居ります▲それは御不自由でございませう、女中衆と小僧の鹽梅の惡いのが一ばんわるうございます●ハイサ夫にあなた、兎角お藥が嫌でどうも成ません、隨分臥つて居るも病なら致方もございませんが、御膳をたべて、そして寢て居れと申つけますが、替たもので何の奉公人も兎角さう致さぬ物でございます▲ハイさやうさ、奉公人根性とやらでお飯をたべては寢て居にくいか致して、どこのも左樣さ、達者な身でも一かたけお飯をたべねへと氣色が惡くなりますのに、ましてや病氣の時は、それだけに養生を致たが能うございます、つまる所は面々の損といふ所に氣が付ません●イエモウいかい事人も遣つて見ますが、遣ふてはございません、遣はれるでございます△ホンニ去年まで居つたお三どのは至極柔和に見えましたッけ●ハイあれは久しく年季に置きましたが、相應な緣がございましたから、かたづけて遣しました▲それはよくなさいましたネ◎今度のはが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んさい者でこまり切ます、叱ればあたけちらして物をこはしますシ、だませばつき上りが致す、あのモウ顔付をするのと、ふて寝を致すのが、第一にわるうございます▲イヽエサ、私どものりんめが、やつぱりさやうさ、大の差出もので、口をきけば手もとがお留守になります、朝飯を仕舞つてそこらを撫まはすと、二階へ上つて髪に半日かゝります、お晝の支度を仕やよといはぬ内は、物干へ出てばかり〳〵むだ口をたゝいて居ます、毎日しれた事に世話をやかせて、啼ても笑つてもせねばならぬ事を骨惜をした物さネ、サアおまへさん、水を汲んと申て井戸端へ出ると、ちよつと一手桶提て來るのも漸一時かゝります、其筈でございますはな、お長家中の男衆を對手にどち狂ふ際には、同じ女中達と寄湊つて内の事を誹りはしりさ、此間も何をいふかと存じて雪隠の蔭で聽て居たら、先の主人をほめちぎつてネ、ナンノ世界中が白壁造りだ、三月が來りやアおさらばさ、お願申ますと手をついてもこんな不吉な内に居るもんか、他人宿に雜用を拂つて、まごついて居るには增だから居てやるのだ、なんぞと太平樂さおまへさん、ホンニ〳〵面の憎さ〳〵としたことが、ネエまアさう申ますはな立聽をすると三尺地の下の虫が死ぬとまうすが、いらざる罪を作りますのさ●ハイサきけば聽腹でつい一言もこゞとを申ますと、口三味線でいけもしない鼻唄さおまへさん、夫に又私共も直てはございませんが、鳶の羽をひろげた樣に髮を出して、あの貌へべた〳〵となすりますから、半襟は白粉に染つて地がわかりませんはな、賤しいお話でございますが、十六錢や廿四錢の紅粉は、二日か三日になめてしまひます、夫につけては元結油も麁末に遣ひますから、孔方の遣ひ方が荒うございます▲イエモウ何方も同じことさ、着替もないくせに能物好て、釜元を働くにもなけなし殿で、やつぱりおしやらくをしたがりますから、おのしは釜元を立まはる内は古い着物を着て、足袋も古いのと履替やれと、毎日〳〵口の酢くなるほど申すがきゝませ

ん、さうしては新しい足袋も裲も濡臭つたので坐敷をのさ／＼踏で歩きます●其裲もチ、四尺裁つて二布にいたせばつい通りてよいのに、七尺も買つて三布にいたすから、サア紐も裁端を集めて縫ふ氣はございません、裲地も松坂はいやだとかまうして廣桟を買ひますから、紐も茶鹿子の縮緬を幅廣に仕立て大きな尻へ巻きつけます、どこの國にかおまへさん、茶屋子屋の女中衆ではなし、商人家のお飯焚が、それでは濟ません▲さやうさ、ホンに能く似たお話がございます、私どもの嫁が湯具を縮緬の中幅を二布にいたして、居るにも立つにもびら／＼と致すから、貴さまはあまり無躾な人だト、女のゆもじといふ物は白木綿二布に規した物で、膝から下へ下る物ではない、上つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい、羽二重だらうが絹だらうが、皆短くあそばすチ、長ゆもじといふ物は下部た人のする業でござるッサ、女郎ですら好麗は昔の風を廢ず、萬事柔しやかだから長ゆもじなどゝいふ事はないといふ事だ、早々止さつしやいと申て異見いたしましたが、それをも知りつゝ、りんの馬鹿めが、幾布にいたした事やら、木綿の長ゆもじを、ちやんとしめましたはな●いかな事でもヲホヽヽヽヽ●▲ヲホヽヽヽヽホヽヽヽ▲あんまり慌れて叱るにもしかられませんアハヽヽヽ●イエモウほんに慌た物でございますよ、着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば、さば／＼とした布子も着られますのに、穢れたらその儘に葛籠の隅へおし込で置ますし、兎角針さへ持ば晝も居眠ますが、ホンニ／＼仕様仕方のない物でございます▲アハヽヽヽ、ホンニ／＼了簡のない物でございます●最うあなたお上り遊ばしますか▲ハイサ●私も御一緒に参りませうト着物を着て出ゆく。(次號には、此あとで女中が二人おか湯をつかひながら銘々の内のおかみさんの惡口を云ふ所を紹介する)

▲**學童日誌**(杉谷代水著)「此書の結構は、一少年が一とせ學校及び家庭の中に起りたるおかしき出來事を思

無邪の筆を以て有りの儘に書き列ねたる躰に綴れるものにて、伊太利國に有名なる佳作「キユオレ」と云ふ書を翻案したものであるが、少年子女の讀み物として、近來の出版物中、第一であると我輩は思ふ。丁度此欄に似あはしき一節を左に轉載する。

「僕は學校の直ぐ向ふの山形の家に遊びに行つた、自慢の圖書室を見る爲に。彼れの家は頗る貧しいゆゑ、彼れは高村のやうに思ふまゝの書物を買ふことは出來ない。たゞ學校の教課書を丁寧に保存し、人から貰つた本と共に飾つて置き、凡ての冗費を節して古本を買ひ足すのみである。彼れの父はそれと知つて、彼れに樅の木の大きな本棚を拵へてやつた。すると彼れは、之れに白い幕を下げて、色々の本を順序よく並べた。幕を引けば、中から洋裝の書物の三段に並んで居るのが現はれる。傳記の書もあれば紀行の書もある、お伽草子もあれば教科書もある、それに又、列べ方を餘程工夫するのださうて、色々の表紙の映り好く並んでゐるところは實に奇麗てある。彼れは得々として、遊びに來る者に、其の排列の方法を說明して聞かせる。そして暇さへあれば本棚の前に坐り、本を眺めて獨り喜んで居る。目錄を造つては數へて見たり、埃を拂つたり、綴目を改めたりして、餘念は一つも無い。僕の樣な遊びずきの者でも、此處に來ると何となく羨ましくなつて、眞似でもして見たい樣な氣になる。」

▲**女大學評論、新女大學**（福澤諭吉著） 是れは是非とも家庭文庫に一冊を備へねばならぬ者である。家庭に關する我輩の意見は、多くの點において福澤先生の感化を受けて居る。左に新女大學の一節を記して、まだ此書を見ぬ人の爲に、其如何なる者なるかを示す。（廣告參照の事）

「夫婦の間も亦然り夫が戸外の經營に失敗して貧窮に沈むが如きは是れは夫婦諸共の不幸にして双方の間に一點の苦情ある可からず一沈一浮共に苦樂を同じうすべしと雖も其夫の品行修まらずして内に妾を飼ひ外に花柳に戯れ敢て獸行を恣いまゝにして内を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

顧みざるが如きは對等の配偶者を侮辱し虐待するの罪にして斷じて許すべからず内君たる者は死力を盡して之を爭ふ可し世間或は之を見て婦人の嫉妬など云ふ者もあらんなれども凡俗の評論取るに足らず」

▲畜類のまどゐ、動物佳話（本田增次郎著） 初のは馬と牛との話、後のは鼠と犬との話、いづれも動物の心にシホらしき所のある事を書いたもので、小供に讀ませるには尤も善い本である。附錄には動物虐待防止會の趣意書もある。（動物虐待防止會の記事參照）（一册五錢づゝ、神田區小川町開發社發行）

▲最新東京繁昌記（伊藤銀月著） 此書の著者は我輩の知る人て、其文章の力は我輩の兼々敬服して居る所である。左に其の一節を寫して御覽に入れる。（廣告參照の事）

△横綱の初土俵入

書生甲「ヤア君、來て居るか」書生乙「君は何時來た」甲「今朝の八時から今迄立ち詰めさ」乙「押され〱て到頭此處迄出て仕舞つた、帽子を落して踏み潰されたのはいゝけれど、小便がしたくつて堪まらない」甲「僕なんか、仕樣がないからステツキで穴を掘つてやつた。處が、小便を出して仕舞うと腹の中がガランドウぢやないか、今朝から何も食はずに押されたり揉まれたりしてるんだもの、堪まらないさ。いくら錢を出さずに見る相撲だつて、こんなに鹽辛くなる程押して來なくとも好さゝうなもんだ」乙「さう云ふ貴殿こそ來なければいゝ。何しろ本場所前に横綱の初土俵入を見られるつてんで、何時もの年より餘計人が寄つたんだ、見渡した所五六萬人もあらうか、人間の顏が丸て往來へ石を敷いたやうだ。これが御足を取るんなら大した儲かりだね」印半纒の若者「見ろ、向ふの隅で押し合ひが始つた、アラ〱、小供が一匹とう〱食み出しちゆまつて、頭の上を轉げてやアがる。今に此方へ轉げて來やアがつたら拾つてツて晩の御菜にしやうぢやねえか。」大勢「大砲オ、大砲ウ。」前掛「大砲が出たとよ、前が高い〱。これア堪まらない。此方でも押し合ひが始つ

た」。土俵には早や横綱張りたる大砲が小山の如く搖るぎ出て、荒岩の太刀持、松ケ關の露拂、小錦が二十山となりて以來久し振りの見物なれば、此招魂社祭典の寄附相撲に集まりたる數萬の好角連は偏に狂するが如し。

▲黑潮（德富芦花著） 今の日本の小說家に時勢の分る者は殆んど一人もない。只一人あるのは德富芦花君である。今の日本の小說家に大いなる理想を持つて世を救はんと欲する者は殆んど一人もない。只一人あるのは德富芦花君である。「黑潮」は君の最近の大作で、今度其第一冊が發行せられた。明治の歷史の大躰を知らぬ者には、讀んでも分らぬ事が多いであらうが、其代り又、此小說に依つて明治時代の思想の潮流を覺る者もあるであらう。（廣告參照の事）

▲禁酒禁煙幼年生理讀本（米國ハント夫人選日本安藤太郎譯） 譯者は日本禁酒同盟會の會長である。「此原書は數個年前ポールドキン夫人來遊の節、吾邦童幼教育上に此種の讀本の必要を感じ、特に小學校教科書用として寄送せられたる者なり。」（定價廿六錢、郵稅六錢、大賣捌京橋區銀座四丁目教文館）

●娘の學ぶべき事

或西洋の家庭雜誌にコンナ事が書いてあつた。西洋でも日本でも、娘の學ぶべき事に違ひは無いと見える。

一、料理。
一、針仕事。
一、看病をする事。
一、秘密を守る事。
一、癇癪を抑へる事。
一、やさしくする事。
一、時間を大切にする事。
一、老人を尊び痛はる事。
一、物の繕ひをヨクする事。
一、おしやべりを愼む事。
一、成るべく善く運動する事。
一、身の廻りをサッパリとする事。
一、そうして何よりも第一に、身分の如何に係らず、女らしき女となる事。

僕にもオバアさんが欲しい

（かわいらしく、しほらしき、讀切小說）

是れは西洋のお話。十二月の朝の七時頃、夜あけの薄い光は窓掛に遮られて、部屋の中はまだ眞暗い。然し、其部屋の中に居る一人の爲には、暗くても明るくても、そんな事に頓着は無い。彼れは寐床の上にムックと起きあがつた。暫くは兩の手で目を擦つて居たが、やがて其部屋の中に居る今一人のマダ善く眠つて居るのを起しはじめた。

「オツカさん、オツカさん、お起きよ。今日は僕のお誕生だもの、そしてお客をするのだもの。」

垂枝夫人は目をあけた。此暗い寒い朝を、今少し寐て居たい。

「秀さん、まだ起きる時ではありませんよ。サ、床にハイつてモ少しお休みなさい。お客は晝からの四時だもの、秀さんが今から幾ら寐ても大丈夫。」

所が秀さん中々承知せぬ。

「だつて僕モウ眠くないのだもの。僕の目はモウつぶつてるの厭だと云ふのだもの。僕は下に行つてお菓子だの、お茶だの、並んでるか見て來なくちやならない。」

垂枝夫人もモウ到底ダメだと明らめた。

「それではね秀さん。お寐マキでも着かへて、そしてココに待つてお居でなさい。まだ下になぞ行くのぢやありません。お茶も、お菓子も、まだ並んであるものですか。朝の御飯を食べて、晝の御飯を食べて、それからの事ぢやありませんか、秀さんのお客は。」

それて秀さんも止むを得ず下に行く事は見あはせて、其代り母の寢床にもぐりこんで、待ちに待ちたる今日のお客の事を、色々と話して居る。

此お客と云ふのは、半分は秀太郎の誕生の爲、半分はクリスマスの爲の催してあるが、垂枝夫人は貧しき孀であるので、固より極めて手輕なお客事である。即ち只、クリスマスの木を飾つて、そして茶と菓子とを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出すだけの趣向である。(クリスマスとは基督祭と云ふ事て、基督の誕生日なる十二月廿五日を祝ふのてあるが、丁度年末の事てはあるし、チョット日本のお正月と云つたような景氣てある。そして家の中に大きな木を立てゝ、それに色々の贈り物をくゝりつけて、夜になると其れに火をとぼす。其贈り物は丁度お年玉と云つたような者て、親しき間の者が互に贈りかはすのてある。それが即ちクリスマスの木てある。)垂枝夫人は只これだけの手輕な催してすら、丸瀨が秀太郎と一しよになつて、總べての手配は私がするからとセガんだので、それてヤッと承知したのてある。丸瀨と云ふのは垂枝夫人の手助けの女中て、凡そ此の倫敦中に垂枝の奥樣ほど善いお方は無く、此世界中に秀さんほど善いお子は無いと思うて居る。

此ストークトン町の小さ家は、殆んど丸瀨が一人て切つてまはして居るのてある。丸瀨は、垂枝夫人お紫がマダ母の翼の下に浮世の榮華を樂しんて居た頃からの召使て、お紫が母の心に背いて貧しき畫家の許に走つた時にも、やはり一しよに付いて行つたのてある。それから、お紫の母の怒が強くて、お紫が送る詫手紙を封も切らずに突返して來た時、それを樣々と慰めた者も此丸瀨てあつた。

お紫の母は、お紫が若し勝手な結婚をするならば、其日から死んだ者と見做すからソウ思へと云つて居たが、お紫の心では、それは只一時のオドシてあると思うて居た。それに又お紫は、畫家としての夫の技倆を堅く信じて居たので、名譽も富も直ぐに得られる者と思うて居た。然るに、それは二つとも當がはづれた。母は其言葉を嚴重に守つて少しも動かぬ。夫は命さへあつたなら實に妻の信仰に酬いたてもあらうが、それから僅に二年の後、熱病にかゝつて死んてしまつた。それて孀のお紫は秀太郎と丸瀨と三人て、其當時住んて居た伊太利をスゴ／＼と引きあげて、倫敦に歸つて音樂の教師になつて、其僅な收入てストークトン町のさゝやかなる家を支へて居た。そうしてモウ母の許しは到底得られぬものと明らめて、二たび便つて行く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心も無かつた。それも其筈、秀太郎が生れてから何週間目かの日に寫眞を取つて、其笑ひを含んで居る可愛らしい顔の下に、「オバアさんへ、秀坊より」と書きそへて送つたれば、「子の無い者に孫のある筈が無い」と云つて、其儘寫眞を返されたのであるから。

それでお紫は夫の死んだ時にも母の助けを求むる心は無く、現在母がドコに住んで居るやら、それも知らぬ事になつてしまつた。

扨こゝでお客事の話に立戻る。元來、此お客事は秀太郎の思ひ立ちで、いつやら秀太郎が春田の源さんと云ふ友達の家のお客に呼ばれて、それが大變に嬉しかつたので、秀さんのお内でも今にお客をするのだと云ひだした。それで秀太郎の誕生日（即ち十二月の廿六日）が丁度善からうと云ふ事になつたので、丸瀬が一人で菓子だの、團子だの、拵へる、お紫は色々の贈り物をクリスマスの木にくゝりつける、秀太郎も去年の誕生日に母から貰つて今まで大事にして使はなんだ二十錢銀貨を、今日こそと取出して何とやら云ふ菓子を買つて來た。

秀太郎は母の側に仰向に寢ながら、さも嬉しげに御馳走の品々や贈り物の品々を數へあげて居る。お菓子に、お團子に、お茶に、林檎に、それから人形もある、旗もある、繪本もある、などゝ指を折つて居たが、フット急に思ひついたらしく母の顔の方に振りむいて、

「オツカさん。なぜ僕にはオバアさんが無いだらう。」

お紫は返事をしかねて居る。

「僕にもオバアさんがあると善いなア。春田の源さんなんぞ二人もオバアさんを持つてる。此間のお客の時にも一人のオバアさんが來て、お茶を汲んだり何かして居た。髮毛の眞白い、親切なオバアさんで、僕の顔にもキッスをして呉れた。僕より外の者は皆んなオバアさんを持つてる。オバアさんと云ふ者はクリスマスの叔父さんが持て來て呉れるのか知ら、えオツカさん。」

秀太郎は廿六日に生れたので、是れはクリスマスの叔父さんから、お紫への贈り物であつたが、叔父さん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

方々に廻つて餘り忙しかつたので、廿五日には廻りきれずに、とう／＼廿六日に持つて來たのだと云ふのが此家の話になつて居る。それで秀太郎は、オバアさんと云ふ者もやはりクリスマスの叔父さんが持つて來て與れるものかと思うて居る。

そこに丁度丸瀬が、「秀さんにお湯をつかはせましよう」と云つて來たので、暫くオバアさんの問題は忘れられてしまつた。

それから朝飯も濟んで、クリスマスの木の飾や何かをするにつけて、秀太郎は又オバアさんの事を考へだした。オバアさんと云ふ者はクリスマスの叔父さんが持つて來て與れる事があるに違ひない。そして、秀さんが一日おくれて來たように、オバアさんも一日おくれて來るかも知れぬ。秀太郎は斯う考へて居た。

秀太郎は春田の源さんの所で、柔しい顔をした、懐々しい聲のオバアさんを見てから、何だか頻りにオバアさんが欲しくなつて、源さんの事が羨ましくなつて來たのである。源さんにはオツカさんもある、オトウさんもある、赤ん坊の妹もある、猫もある、オバアさんもある。それに秀さんにはオツカさんと丸瀬との外に何んにも無いのであるから、如何にも寂しくてならぬ。若や、若しや、今日のお客にオバアさんが來て與れたら、と思うたばかりで秀太郎はゾク／＼するほど喜んだ。然し又考へて見ると、若しオバアさんが來るとすると、其オバアさんに贈るべき品物が無い。そこで、

「オツカさん。クリスマスの叔父さんは今日オバアさんを僕に持つて來て與れるのぢや無いか知ら。それだとアノ木に付けてある贈り物が足らなくて僕困るがなア。」

母は決してオバアさんの來る事は無いと答へた。從つて贈り物も入らぬと云つた。

秀太郎は默つて居たが、まだ母の言葉を信じて居らぬ。晝が過ぎて、母は暫く寢室に行つて休息する、丸瀬は臺所に忙しくして居る、其間に秀太郎は又獨で考へた。オツカさんはア丶云ふけれど、用心の爲にオバアさんに贈るべき物を買つて來ておいたが善いと。そ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れて秀太郎は臺所に行つて丸瀬にお錢を呉れと云つた。丸瀬は今忙しいので、秀太郎の云ふまゝ白銅貨を一つ渡してやつた。

秀太郎はそれを持つて驅けだして、二三町先のおもちや屋に行つて、腹の所を摘めばピイ／＼と鳴く美しい鳥を一羽買ひ取つたが、嬉しさに方角も忘れて、内に歸るつもりでズン／＼と先の方へ走つて行つた。折しも雪は降りだす、人はドン／＼と走りだす、往來は混雜を極めて居る。秀太郎は向ふから走つて來た小供に突飛ばされると仝時に、後から驅けて來た二頭立の馬車に驚かされて、キヤツと云つてソコに倒れた。人だかりがする、巡査が來る、何でも大怪我だと云つて醫者が腕をまくつて來る、一時は大變な騒ぎであつたが、秀太郎は一向平氣で、泥だらけになつて涙はこぼして居るが、僕は何とも無いと云ふ。馬車の中からおりて來た年寄つた婦人は、此寒いに兎も角もと云つて馬車の上に秀太郎を抱きあげて、内が知れぬなら一先づ警察署まで此馬車で送り届けてやりましようと云つ

た。秀太郎はジツと其老婦人の顏を見て居たが、

「アナタ秀さんの所に來て呉れたオバアさんぢや無いの」

老婦人は、それは何の事かと聞いた。秀太郎は今日の事の一部始終を話して、手に持つて居る美しい鳥を老婦人に見せた。老婦人は何と思うたかシク／＼と泣きだした。「ア、私が惡かつた。あんまりキツイ事を云つて、とう／＼會ふ事も出來ないようになつてしまつて」などゝ獨語を云つて居る。秀太郎には何の事やら分らぬけれど、何でもオバアさんは悲しくて泣いて居るのだから、是れは何か見せて慰さめねばならぬと思うて、ポッケットの中を探して居たが、探しだしたのは迷子札てあつた.

「秀さんが道て迷つたら是れ人に見せるのだとオツカさんが云つたよ。」

老婦人は「オ、、それがあれば」と云つて迷子札を取りあげたが、「ストークトン町、垂枝秀太郎」とあるのを見て、驚いたも驚いたか、いきなり秀太郎を抱き

すくめて、「お前は私の孫だ」と云つた。
それから馬車は直ぐにストークトン町の垂枝夫人の家の前に付けられた。秀太郎は馬車からおりて母の手に飛びつきながら、
「オツカさん、オツカさん。僕はオバアさんにあげる物を買ひに行つたの。そうすると馬が秀さんを蹴たふしたの。そうすると、クリスマスの叔父さんが秀さんのオバアさんを連れて來て與れたの。」
老婦人は震へた聲で、
「お紫、お紫。私が惡かつた。よくマア無事て居ておくれだ。」
跡は記すまでも無い。賑かなお客事があつて、秀太郎は源さんのよりもモット善いオバアさんが出來たと云つて大喜び、オバアさんは又、秀さんの贈り物の此鳥を、イツまでも大事にして取つておかねばならぬと云つて、嬉し泣に泣いて居た。(をはり)

●合作の手紙、倫敦の日本料理

去年の秋、我輩の家で月見の宴を催した時、フト倫敦に居る友人の事を思ひだして、一つ皆んなて合作の手紙を送らうでは無いかと云ふ事になつて、席上の人々が銘々に十行二十行づゝ、或は其夜の御馳走の品々を書き、或は今さしのぼる月の景色を書きなどして、
「コンナ樂みは倫敦では出來まい、どうだ羨ましいか」
などゝ云つてやつた所が、今年の一月の初になつて其人から返事が來た。其文句に曰く。
「月見の宴は羨ましい、日記を調べて見るに、僕は其日はまだスコットランドに滯在中て、晝は湖水にボートを漕ぎ、夜はテーブルテニス(ピンポン)の戯れをして過した日だ。」
「五六日前、君の此手紙を受取つてから、僕もたまらなくなつて日本料理を食ひに行つた、此料理店は去七月より開業したので、主人は佛蘭西あたりてゴロついて居つた日本人て、佛蘭西の若い女(妾だらう)を一人使つて、それと二人て倫敦の中央に自由亭と云ふ看板を擧げた、家は小さな裏家だが、在留日本人の客が隨分あるそうだ、牛鍋、鳥鍋、天プラ、田舍汁、鯛のサシミ、卵燒、酢の物、香の物、飯などが出來る、倫敦でコンナものが食へるとは、有がたい世の中だ」

●編輯及び發行事情

▲頁數　如何にも少い。友人も賣捌店も今少し增さねばいけぬと忠告して吳れた。何分見場が惡いと云ふのてある。然し、我輩に取つては、是れだけ書くのも隨分の骨折てあつた。此上頁數を增す事は、今の所、我輩の頭の力も、金の力も許さぬのてある。善くても惡くても是れて我輩の出來るだけを盡したのてあるから致方が無い。

▲定價　も(紙數に比べては)高いに違ひない。然し素人商賣で是れより安くする事は到底出來ぬ。

▲發行回數　月二回にしたいのてあるが、まだ中々そこまては運びかねる。

▲挿畫　石版摺だの、寫眞版だのと、そんなケバ〱しい者を付ける事は迚も出來ぬが、次號からはチョット面白い畫を少しづゝは入れる積りてある。

▲寄書　追々は友人先輩に賴んて、有益なる者、趣味ある者、いろ〱の寄書をも載せる積りてあるが、第一號は(内村先生の祝辭の外)徹頭徹尾、我輩の筆て書きあげた。當分の間(發行回數の少い間、頁數の少い間)は此編輯法を取る積りてある。善くても惡くても、我輩の雜誌には我輩の文字を最も多く載せるのが當然てあると思ふ。

▲名譽社友　本誌發行につき、種々の點において助力を與へられたる友人先輩が甚だ多い。感謝の意を表する爲、名譽社友として此に諸君の姓名を記す。中にも内村先生は尤も多くの奬勵と助言とを與へられたる人てある。

相島勘二郎君	竹下　浩君	永島今四郎君	黒岩　周六君
山縣五十雄君	内村　鑑三君	幸德傳次郎君	矢野　二郎君
山縣悌三郎君	斯波　貞吉君	加藤　米司君	小林芳三郎君
佐治　實然君	篠田恒太郎君	犬塚　武夫君	濱田　頴造君
征矢野半彌君	荒川銜二郎君	志津野又郎君	

▲由分社　は堺利彥と小林助市との組合てある。家庭雜誌は由分社から發行せられる者て、其編輯は堺之を擔任し、其他の事務は小林之を擔任する。故に、本誌の紙上において、「我輩」と云ふ者は堺てあつて、「本社」と云ふ場合は小林と堺との兩人を意味するのてある。但し、是れは社會に對する道德上の責任の事て、法律上においては、編輯人兼發行人として堺利彥が總べての責任を負ふのてある。

▲第二號　は五月二日に發行致す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺枯川著

家庭の新風味

全六冊合本

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。

著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんとを望む。

著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんとを望む。

要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんとを望む者である。

赤表紙合本 全一册 割引價金一圓 郵稅當方持

取次所 東京京橋區新港町一丁目十七番地 由分社

動物虐待防止會叢書

第壹編

我家の犬猫

堺枯川著 新刊

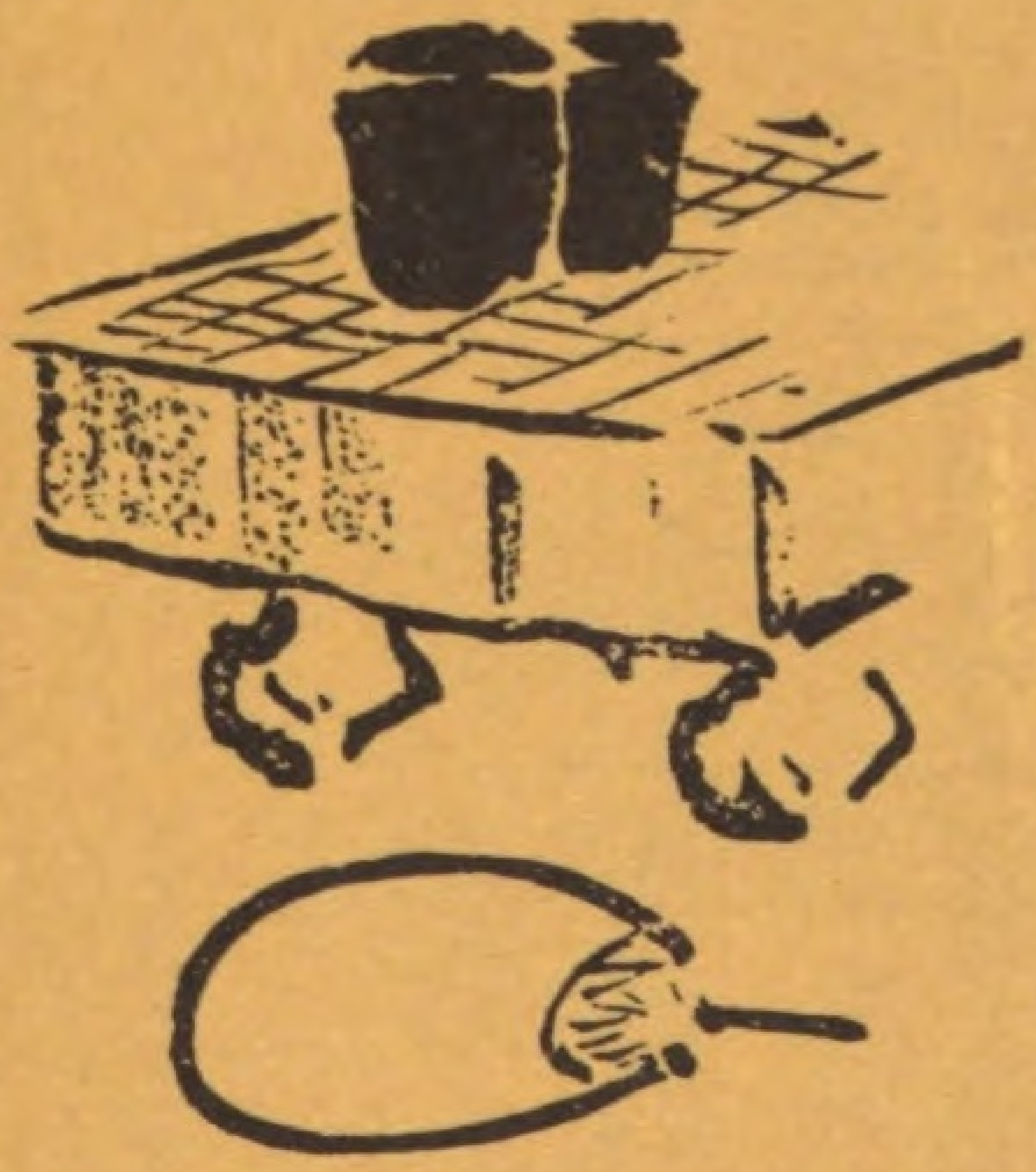
目次

▲第一、キジ▲第二、福▲第三、八
▲第四、近處の犬▲第五、犬のダニ、
獎しの惡き猫▲第六、愛犬黑▲第
七、藪際の小犬ポチ▲第八、丸
▲第九、赤と黑▲第十、丸第一世

(割引價(郵稅共)郵券十錢)

取次所 東京市京橋區新港町一丁目十七番地 由分社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA